

会長就任にあたり

会長 工学博士 米田正文

昭和 33 年度わが国土木事業量は 5500 億円あまりと推定されており、これは昨年度の 1 割増に
当り土木史上最大の額であります。このことは終戦後の戦災処理からようやく国土の保全開発の本
格的事業が推進されつつあることを示しており、今後わが国の特性上国土の利用開発が国策の基
本的問題として発展してゆくことは疑いをいれないところであります。

わが土木学会は創立以来 44 年にわたり、うまざつゆまざ土木工学の進歩のために地味な努力を
続けてきたのであるが、先に述べたわが国の現状にかんがみ、さらに一段の飛躍が要請されてお
るところであります。

土木工学はその本質上他の自然科学部門の発達によつて進歩を促されることが多いのであるが、
最近の電気、機械、化学等の発達はめざましきものがあり、これに対応してわが土木界もまた旧套
を脱して近代的にして合理的、かつ経済的な構造と工法を生んでゆかねばならないと思います。

原子力、高分子科学、電波の発達等はただちに土木工学に利用しなければならない問題でありま
す。海外からの輸入技術でなく、わが国独自の創意工夫による新技術の発達を待望する声は大きい
と思います。

この問題の解決には土木界全体としての努力が必要であつて、例えば最近さかんになつてきた綜
合研究の体制が要望されるところである。土木工学の特質上特にこの点を強調したいと思ひます。

また基礎的な問題としては専門教育をする大学の土木工学科の内容も検討する必要があるのでは
ないかと思う。大学の講義内容は基礎学科は別としてその時代に相応した変化をする必要があると
思われるにもかかわらず、種々の制約を受けて意のごとくならない点があるのではないかと思う。
この問題も本学会として研究したいものと思ひます。

このような重大な時機に立つわが土木学会の会長に今回私が選任せられたことについて私自身、
浅学不敏をかえりみてこの重責に耐えられるかに多大の懸念を持つものでありますが、会員各位の
絶大の御指導御協力を得て、私の力の限りを尽して本学会の進歩発展のために努力を致す覚悟であ
ります。

会長就任にあたり所懐の一端を述べ、会員諸氏の御援助を要請して御挨拶といたします。

土木学会誌編集委員

(昭和 33 年 6 月より一部交代)

委員 長	田原保二	副委員 長	井口昌平	委員	田村浩一	委員	三宅正夫
委員	栗津清藏	委員	尾崎寿一	委員	高橋克男	委員	都淳一
同	伊東茂富	同	大西清一	同	武部健一	同	南俊次郎
同	諫山廉	同	岡崎忠郎	同	寺島重雄	同	南部三郎
同	上東公民	同	奥村敏恵	同	三上澄		
同	尾形武男	同	海保久雄	同	荒井利一郎(中部支部)	同	小西一郎(関西支部)
尾崎	晃(北海道支部)	後藤	幸正(東北支部)	幹事	深谷俊明		
網干	寿夫(中四支部)	山崎	徳也(西部支部)				